

## 新聞および雑誌記事への掲載写真による北山杉の森林像の変遷に関する研究

A study on the transition of forest images of Kitayama-sugi in photographs on the newspapers and magazines

喜多 明\* 下村 彰男\*

Akira KITA Akio SHIMOMURA

**Abstract:** After modernization, photographs are used as a tool to describe landscape correctly. Landscape photographs on the mass media are represented with “way of seeing” by publisher and spread out beyond a local area. The landscape images of those photographs are shared among readers and could be established as common images. However, landscape preservation should be based on the historical and cultural process of landscape images rather than authorized images. This study clarified how landscape images had changed by analyzing the photographs and topics of Kitayama-sugi in Kyoto on the newspapers and magazines, and presented relations between the changes of landscape images and local space. The results: 1) Forest and its change were accepted through the way of seeing not always through how they were seen exactly; 2) The same forest type had changed its way of seeing in the time. The form and method of the forest should be determined according to discuss the forest images. Nowadays local residents raise their concern to have new forest images as a way to preserve the forest, and try to make it possible in landscape preservation and sustain wood production.

**Keywords:** *Kitayama-sugi, forest image, photograph, transition*

キーワード：北山杉, 森林像, 写真, 変遷

### 1. はじめに

近代以降、写真は地域を正確に描写し、離れた場所や時間においても地域を具体的に伝える手段として用いられてきた。ページャーは「イメージとはつくり直された、あるいは再生産された視覚だ。…すべてのイメージはものの見方を具体化する。写真でさえもそうである」<sup>1)</sup>と述べ、写真は無限の対象の中から特定の対象を選択する行為に撮影者のものの見方が反映されているとしている。対象を地域に置き換えてみると、地域に広がる無限の対象に対して撮影者が認識した地域像が写真に現れている、といえるだろう。マスメディアに掲載される地域の写真は、撮影者と共に製作者側のものの見方も多分に盛り込まれる。そうした地域の写真が広く伝播されれば、複数の観賞者に共有された地域像（集団表象）として定着する可能性を秘めていると考えられる。しかし、そうした外部のものの見方をはらんだ写真によって集団的な地域像が形づくられ、内部の景観形成に無条件に反映させることは、地域内の地域像を排除することになりかねない。

ものの見方（あるいは、まなざし）に関する研究は、記号論の概念を用いて地域の内外のまなざしを比較した研究<sup>2)</sup>や、国家レベルの空間の変容の過程で「ふるさと」というものの見方が制度化されたことを明らかにした研究<sup>3)</sup>がある。また、風景画や名所図会など表現された資料を用い風景または空間の変遷を明らかにした研究は散見される。しかし、写真を用いて、地域外部のものの見方が、空間にどのように付与され、空間の変容の過程でどのように変遷を辿るのかについて明らかにした研究はない。

本研究は北山杉の地域像（森林像）を対象とする。北山杉は京都府北区中川北山町（以下、中川地区）を中心とする北山林業地域で磨丸太が生産される杉である。北山丸太とも呼ばれる磨丸太は茶室や数寄屋建築の化粧材に使用されることから、見た目の美しさを追求し、育林の過程で高度で集約的な技術を発達させたといわれる。一方、昭和36年に川端康成の小説『古都』の題材とされたことで、「京都人ですらあまり気にかけていなかった北山

杉までが、一躍知られることに」<sup>4)</sup>なり、翌37年には中川地区で映画『古都』の撮影が行われ、映画を通して北山杉の画像が一般の目にも触れるところとなった。つまり、京都を含んだ全国の外部のものの見方が北山杉に対して突如注がれたことになる。平成23年には国の重要文化的景観の選定を目指すことが報じられている<sup>5)</sup>。北山杉の森林像の変遷に、誰のものの見方がどのように付与されたかを検証しておくことは、地域の森林に様々な側面を認め、豊かな景観形成を図る上で重要なことだと考えられる。

そこで本研究は、北山杉を対象に、森林の変容を踏まえ、森林写真と掲載された記事の話題から森林像の変遷を明らかにし、森林の空間の変容と外部のものの見方との関係と、今後の景観形成のあり方について考察をする。

### 2. 研究の方法

まず、森林の変容は、中川地区を中心に歴史資料ならびに既往研究から把握し、構成林種の規模および配置、枝下高の変化を中川住民へのヒアリングで補足した。次に、森林像の変遷は、媒体の中から北山杉に関係する記事を収集し、どのような話題で取り上げられたかを踏まえ、記事に掲載された森林写真を分類・整理することで明らかにした。以上の結果から、現実の森林の変容と森林像の変遷との関係を考察した。媒体の選択に際し、媒体により全国レベルから市町村レベルまで販売の規模が異なることが想定された。そこで、国内全域で販売された媒体と、北山杉が所在する京都市を中心とした媒体の2種に分類した。また、媒体によって伝達される情報は異なると考えられることから、社会の幅広い事象を取り上げる新聞、観光を専門に扱う旅行雑誌、林業に特化した林業雑誌の3種に分類した。時代の変化を追うため、6分類の中で最も長期間にわたって定期的に刊行する媒体を調査対象とした。なお、京都の林業雑誌は長期間刊行を続ける媒体を確認できなかったため対象外とした。そして、創刊から平成23年8月かけて、北山杉(スギ)、北山林業、北山丸太、磨(き)丸太、台

\*東京大学大学院農学生命科学研究科

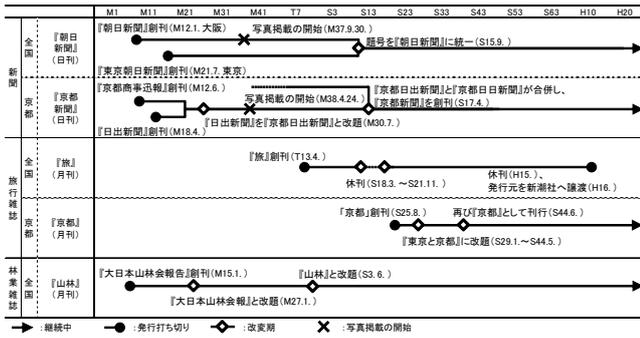


図-1 調査対象媒体の沿革

杉(もしくは台株) (以下、総称して「北山杉等」)に関する記事を収集した。

5種の媒体とその沿革は次の通りである(図-1)。全国の新聞紙には『朝日新聞』を選んだ。創刊の初期から現在に至るまで国内有数の発行部数を誇る全国紙であり、昭和36年10月8日から翌3年1月23日にかけて川端康成の小説『古都』が連載された。『京都新聞』は京都府および滋賀県の地方紙で、調査では前身の『日出新聞』、『京都日出新聞』、『京都新聞』から記事を収集した。全国の旅行雑誌には、大正13年4月から平成15年の休刊に至るまで国内外の旅行情報を広く扱った『旅』を選んだ。京都の旅行雑誌に扱った『京都』(以下、『雑誌京都』)は、昭和25年8月に京都の文化全般を紹介する月刊誌として創刊された。全国の林業雑誌に選んだ『山林』は明治15年1月に『大日本山林会報告』として創刊され、改題を経て現在まで続く月刊誌である。

### 3. 北山杉の森林の変容

#### (1) 明治期まで：台株林方式による磨丸太生産

北山杉について史料で確認できる記録は、安永7年の「山城細見大絵図」の土産物に「北山丸太」が見えるのと、安政5年に中川地区で台株への枝打ちが行われたというものである<sup>8)</sup>。これら記録に従えば、遅くとも18世紀後半には磨丸太が生産され、19世紀前期には台株林方式が確立していたと考えられる。明治4年の立木を進呈した記録<sup>7)</sup>や、明治14年の物産記録<sup>9)</sup>から、森林は台株林、スギ用材林、ヒノキ用材林、雑木林、マツ林で構成されていたと考えられる。明治42年当時の台株林の状況は、京都府葛野郡、愛宕郡、北桑田郡の範囲に小規模に点在していた<sup>9)</sup>。その中で、中川村は山裾に台株林を大規模に栽培させ、それを囲むようにスギやヒノキの用材林、山腹に雑木林、山頂にアカマツ林を、山の標高に応じて林種を3等分していた(図-2)。森林からは定期的にタルキ、薪炭、マツタケ等を、臨時的に丸太や一般用材を生産した<sup>10)</sup>。先の明治42年の記録によれば、明治41年を境に磨丸太の生産量が増加している。木材の生長が抑制される台株林方式は、品質の優れた色沢を生み出すことができたが、一方で長伐期かつ作業効率が悪いという生産性の低さに難点があり、明治末には生産量の限界に近づいていたとみられる<sup>11)</sup>。

#### (2) 大正期から昭和30年代：並丸太一斉林方式の導入

磨丸太は京阪神と中心とした販売にとどまっていたが、大正中

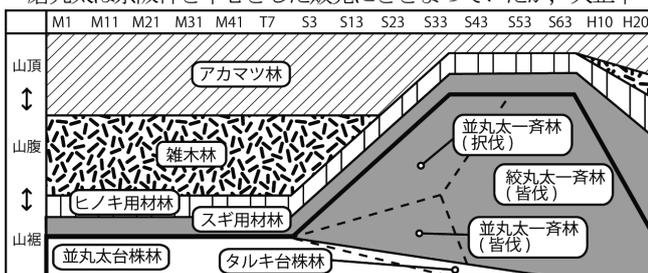


図-2 構成林種の変化

期から昭和初期にかけて関東方面へも流通され始め、磨丸太は全国的に広まる傾向にあった<sup>12)</sup>。しかし、すでに生産量の限界に達していた供給側は全国規模の需要の高まりに対処するために、「似た山丸太」と呼んで軽視していた用材生産用の一斉林の間伐材を応急的に出荷した<sup>13)</sup>。この措置は、作業が効率的かつ短伐期で生産できる一斉林方式の高い生産性を認識させる契機となり、丸太を生産していた台株林は一斉林へと改植が進められた<sup>14)</sup>。その際、林地を細かく分割し、毎年小規模な植林を繰り返したと考えられる。また、伐採は、注文に応じた寸法に達した立木を順次択伐した<sup>15)</sup>。丸太一斉林方式による磨丸太の色沢を保つために、高頻度に枝を打ち、木の生長を抑制させた<sup>16)</sup>。伐採までには林齢に応じて5~10回を数えた。台株林は、収入に占めるタルキの割合は依然として丸太よりも高かったことから、タルキ生産用として土壌条件の肥沃な山裾に残された<sup>17)</sup>。薪炭材を収穫した雑木林や、マツタケを採集したアカマツ林に対しても丸太一斉林への転換が進み、雑木林は戦後までにほぼ消失した<sup>18)</sup>。マツタケは、戦後も重要な収入源の一つであった。林種転換の過程にあった中川地区の森林は、山裾に台株林と一斉林、山腹に雑木林もしくはスギ・ヒノキ用材林、山頂や尾根筋にアカマツ林が配置され、多種の林種で構成されたと考えられる。

#### (3) 昭和40年代：絞丸太一斉林方式の普及

昭和30年代後半以降、高度経済成長を背景に宿泊施設の増改築や一般住宅の建設が急増し、その客室や和室には床の間が据えられ人工絞丸太の床柱が用いられた。人工絞丸太は、立木の幹に15cm程度の細長い棒を無数に巻きつけて表面に凹凸(絞り)を施した磨丸太であり、昭和40~50年代を通じて磨丸太の総生産量の70%以上を占めた<sup>19)</sup>。品質の基準は色沢の良さから絞り模様の出来に変わりつつあった。人工絞丸太を中心に生産する林家は、枝打ちを省略して短期間で太らせ、色沢の悪さを絞り加工で補った。一方で、従来通り色沢の良さを売りにする銘木や、桁や長押などの大径材を生産する林家は、高頻度に枝打ちを繰り返し択伐する方式を続けた<sup>20)</sup>。伐期は25~60年生の間で、枝下高は6~15mと幅広かった。

昭和34年の建築基準法改正でタルキ使用に規制がかかり需要が激減したことにより、タルキ台株林は昭和40年代に入り丸太一斉林へと転換された<sup>21)</sup>。また、大正期から減少が続いた丸太台株林はこの時期に消滅した<sup>20)</sup>。昭和40年代は明治期に磨丸太生産を担った台株林が激減する時期でもあった。また、昭和40年代から50年代にかけて、マツタケの生育が減退したアカマツ林はヒノキ用材林に代わった。山裾から山腹にかけての約2/3が丸太一斉林で占められた。

#### (4) 昭和50年代から平成9年：枝下高の低下

オイルショックを機に全国の新設住宅着工戸数は減少した。また、和室を設ける住宅の減少<sup>22)</sup>や、和室を設けても磨丸太が用いられなくなった<sup>24)</sup>等の影響で、需要は徐々に減少を示した。さらに、大径材の需要減も加わり、銘木を生産した林家も人工絞丸太の生産を増大させ、枝打ちを控え短期間で伐採する方式を採用した。枝下高は5m~9mへと軒並み短縮化した。さらに、増産とコスト低減を図るために、同一林分で伐期を設定し一斉皆伐を行った結果、枝打ちの頻度や枝を打ち上げる高さが一定し、同一林分内で枝下高が揃った丸太一斉林が見られるようになった。大正期から小規模に植林された丸太一斉林は、林齢の異なる林分を混在させ、隣接する林分との樹高や枝下高に高低差を生み、モザイク状を呈した。

#### (5) 平成9年から現在：丸太一斉林から用材林への転換

住宅建材に強度性能が安定し規格に狂いが無い部材が要求されるに伴い、切断せず丸太のまま使用されることを特徴とする磨丸太は敬遠された<sup>25)</sup>。平成9年の人工絞丸太需要の急落により、人

工紋丸太に依存した北山林業は本格的な不振に陥った<sup>26)</sup>。林業を完全に諦める生産者も多く、育林を続ける丸太一斉林も利便性の良い道端に限られた。山腹から山頂にかけての丸太一斉林は、作業の負担の少ないスギ用材林への転換や、放置もしくは伐採後再造林せず雑木林へと遷移した林地が増加した。コスト削減のため枝下高はさらに低下し、5m~7mの範囲に集中した。林分間の枝下高の高低差は縮まり、丸太一斉林のモザイクは不明瞭になった。

#### 4. 北山杉の森林像の変遷

北山杉等の記事に掲載された写真の中から、屋内の写真、事件・事故・災害等を写した写真、森林が写されていない写真、不鮮明な画像の写真を除き、記事の記述やキャプションから北山杉の森林を写した意図があると判断できた162枚の森林写真を選択した。選んだ森林写真を幹の見え方を基準に分類した結果、7つの森林タイプに分けることができた(図-3)。「こずえ/ちらちら」、山裾に幹が並んだ森林を写した「整列/山裾」、山腹に幹が並んだ森林を写した「整列/山腹」、林内に入り幹を至近距離から写した「林内」、樹冠が密集し幹が見えない「こずえ/幹なし」、台株の形態に注目して撮影した「台株」である。その他に、上記のタイプに該当しない森林タイプを「その他」とした。さらに、選択した森林写真の記事145件をタイトルから判断して14種に分類し、さらに5類型に分け、森林タイプとの関係を整理した(表-1, 表-2)。

##### (1) 明治34年から昭和30年代前半

森林写真は全て『山林』から収集したものであり、北山林業に関する話題である。明治34年の『大日本山林会報』227号が収集した森林写真で最も古い。枚数は少ないが、「整列/山腹」以外の全タイプを確認することができる。

##### (2) 昭和30年代後半から昭和50年代後半

この時期には、森林写真の総数は73枚を数え、他の時期と比較して最も多い。昭和30年代までは全国の媒体の『山林』と『旅』の中で、北山林業、京都郊外の旅行案内の話題で扱われた。昭和40年代に入ると、京都の媒体でも北山杉が写真付きで紹介され、話題も多岐にわたる。【北山杉】、【地域社会】、【象徴・表象】で森林写真が取り上げられることが多い。【北山杉】の記事では、『山林』において昭和35年5月号から4ヶ月間にわたり表紙を飾る。『山林』以外にも『朝日新聞』や『京都新聞』でも林業地として取り上げる。また、昭和58年には『雑誌京都』198号で「凛呼・北山杉」と題して北山杉の特集号が組まれる。【地域社会】に関する記事では、京都郊外の旅行案内での取扱いが昭和35年3月号『旅』から始まり、『山林』を除く媒体でも紹介される。『京都新聞』は地域で起きた出来事の他に、京都の地域社会を紹介す

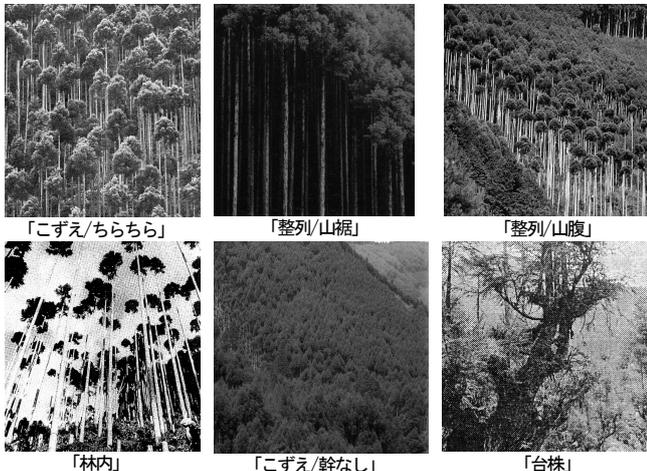


図-3 森林タイプの例

表-1 森林写真が掲載された記事の分類

類型	種別	説明
【象徴・表象】	『古都』の舞台	小説や映画などのモデルとなった地域の紹介
	京都の代表	京都府の木など京都や京都の自然の代表として扱われた記事
	文芸のモチーフ	歌謡や応募写真など読者の文芸のモチーフに用いられた記事
【北山杉】	企業広告	企業広告に使われたイメージ画像
	北山林業	造林や経済活動について専門的に扱われた記事
【地域社会】	北山杉	特定のテーマに沿って取り上げるのではなく、単独で北山杉に着目した記事
	京都郊外の旅行案内	京都市市街地に近い地域の旅行案内
	京都の地域社会	京都府の地区や業者「まちやふるさと」と呼び、社会・生活を紹介する記事
【季節・風物】	地域の出発点	地域で起きた出来事を扱った記事
	花・木・寺	京都府で見られる植物を紹介した記事
【自然環境】	季節	桜・紅葉・雪など季節を示す風物をテーマにした記事
	生き物・生態系	自然の仕組みや大切さを伝える記事
	自然志向型レジャー	アウトドア、ハイキングなど自然に触れ合うレジャー活動
	環境保全	自然や風景などを保全する取り組みに関する記事

表-2 媒体別・記事別・時期区分別の森林タイプ

時期	森林タイプ	媒体別					記事別					合計		
		朝日新聞	京都新聞	雑誌	山	旅	全国の媒体	京都の媒体	象徴・表象	北山杉	地域社会		季節・風物	自然環境
M34	こずえ/ちらちら				1	1	1		1					1
	整列/山裾				1	1	1		1					1
	整列/山腹													
	林内				1	1			1					1
	こずえ/幹なし				2	2			2					2
S30前	台株				1	1		1						1
	その他				1	1		1						1
	こずえ/ちらちら		2	4	4	4	8	6	2	4	3	5		14
	整列/山裾	1			6	1	2	6	4	4	2	1	1	8
	整列/山腹	1	7	8	7	7	16	14	8	12	8	2		30
S50後	林内	2	4	1	4	1	4	8	3	3	6			12
	こずえ/幹なし				2	2		2						2
	台株		3		2			5		1	4			5
	その他			1	1		1	1	1	1				2
	こずえ/ちらちら	1	2	1	4		2	6	3	1	2	2		8
S60	整列/山裾		11		8		19	8	2	1	8			19
	整列/山腹		15	1	1	1	2	16	7	4	3		4	18
	林内	1	9		2		1	11	4	1	2	2	3	12
	こずえ/幹なし		5		3			8			3	3	2	8
	台株		1		1	1	1	2		2		1		3
H10前	その他		1								1			1
	こずえ/ちらちら		2					2						2
	整列/山裾				1			1				1		1
	整列/山腹	1	3		2		1	5			2	2	2	6
	林内		2					2				2		2
H10後	こずえ/幹なし													
	台株		1					1					1	1
	その他		1					1						1
	こずえ/ちらちら										1			
	整列/山裾													
(IV)	林内													
	こずえ/幹なし													
	台株													
	その他													
	合計	7	69	16	48	22	45	117	72	84	78	4	5	162

る企画をたびたび連載し、そこで北山杉にたざざる地域の生活を記す。【象徴・表象】の話題では、小説や映画の舞台を特集する記事の中で、『古都』の舞台となった北山杉が取り上げられる。昭和41年の『京都新聞』には府民の応募により京都府の木に認定された記事<sup>27)</sup>や、翌42年には北山杉が国鉄の観光ポスターに採用された記事<sup>28)</sup>が報じられるなど、京都を代表する自然あるいは観光地としての評価を受ける。『旅』と『雑誌京都』には企業広告でも使用された。【季節・風物】として、『古都』の最終章のタイトル「冬の花」にちなみ、京都の冬にふさわしい場所として、雪をかぶる北山杉の写真が載る。また、『京都新聞』の京都の花木を紹介する連載記事の初回に登場する<sup>29)</sup>。【自然環境】では、昭和49年『山林』1077号において、環境保全と林業との関係を問題とした論説の中で、北山林業が引き合いに出される。

森林写真が掲載されることが多い【北山杉】、【地域社会】、【象徴・表象】の話題の中で「整列/山腹」、「こずえ/ちらちら」、「林内」の森林タイプが掲載される傾向にある。「整列/山腹」が合計30枚を数え、他の時期の森林タイプと比較しても最多を誇る。【北山杉】に対して12枚、【象徴・表象】と【地域社会】の話題でも各8枚ずつを示し、この森林タイプの枚数の多さは際立っている。「こずえ/ちらちら」は2番目に枚数が多いが、「整列/山腹」の半数以下である。【季節・風物】に関する話題での掲載が多いが、他の話題と大きな差はない。「林内」は【地域社会】の話題で掲載される。

##### (3) 昭和60年代から平成10年代前半

全国の媒体での取扱いは減少し、京都の媒体の掲載にはほぼ限られる。写真枚数は前期に次いで多い69枚を数える。【象徴・表象】の話題が最も多く、【自然環境】、【地域社会】が続く。これまで北

山杉の中心的な話題であった【北山杉】が激減する一方、前期で1枚のみの【自然環境】は17枚に急増する。『雑誌京都』には、【自然環境】の話題として北山杉の中でレジャー活動を楽しむ話題が見られる<sup>30)</sup>。『京都新聞』でも【自然環境】を重視する傾向が見られ、生き物・生態系を紹介する連載企画が組まれる。【季節・風物】に関しても、これまで北山杉の季節の代名詞とされた冬から、紅葉や桜など四季を通じたテーマで取り上げられ始める。掲載数を増加させた【自然環境】や【季節・風景】に対し、平成10年代前半を最後に、企業広告への掲載や京都の代表、『古都』の舞台の話題は見られなくなり、【象徴・表象】の話題で扱われることはなくなる。【北山杉】で散見されるのは産業不振やその中で林家の取り組みを紹介する記事になる。

前期の森林タイプでは「整列山腹」が突出していたのに対し、この時期には森林タイプ間に大きな開きはない。最も多く掲載されたのは「整列山裾」、次いで「整列山腹」、「林内」となる。話題が多かった【象徴・表象】では「整列山裾」と「整列山腹」は全体の約1/3ずつを占める。【自然環境】に対しては「整列山裾」が半数近い枚数を数える。【地域社会】では「台株」を除く全ての森林タイプが掲載される。以上の話題に「整列山裾」、「整列山腹」、「林内」が掲載され、特にこれまで使用が少なかった「整列山裾」の増加が目立つ。

#### (4) 平成10年代後半から現在

この時期は他の時期より年数が短いこともあり、写真総数は13枚で、前期の約1/3にとどまる。媒体別では『京都新聞』での掲載に絞られ、【自然環境】が全体の話題の半数を占める。前期に引き続き、生き物・生態系や自然志向型のレジャーが話題にされる。それらに加えて、文化的景観の保全に関する記事が新たに現れる。地域の出来事でも地元の景観保全の取り組みを報じている。『雑誌京都』では【季節・風物】の話題で3枚登場するのみとなる。森林タイプに関しては、「整列山腹」が6枚と約半数を占め、【自然環境】の話題の他に、【地域社会】、【季節・風物】が掲載される。前期で最も写真枚数が多かった【象徴・表象】と、長らく北山杉の話題で欠かせなかった【北山杉】に関する記事がゼロになる。

### 5. まとめと考察

森林は、大正期以前において磨丸太は台株林で生産され、台株林、用材林、雑木林、アカマツ林で構成された。その後、昭和30年代までに丸太台株林、用材林、雑木林から丸太一斉林への転換が進んだ。しかし、当時の森林写真は少なく、また森林タイプも定まっていなかった。昭和30年代後半から旅行者によって京都郊外の北山杉が着目され、自然の中の人工性が称賛された<sup>31)</sup>。産業が好況となる昭和40年代の丸太一斉林は、択伐と皆伐が共存する森林であった。山腹にまで拡大した丸太一斉林の幹が林立する様子が、京都の代表や『古都』の舞台といった象徴的意味が与えられ、さらには北山杉を生産する地域社会にも興味の視線が注がれた。この森林像は京都ことどもならず全国の媒体で捉えられ、広く読者に伝えられた。この森林像の大きな変化は昭和40年代から始まり、『古都』がマスメディアに与えた影響がうかがえる。昭和50年代から平成9年にかけて一林分単位で枝下高が揃いモザイク状をなす丸太一斉林が広がるが、昭和60年代の森林像は、モザイク状に広がる森林ではなく、山腹や山裾に並んだ幹であり、自然性を感じさせる北山杉であった。自然環境を重視する見方には生態系の乏しい人工林に対して懐疑的な意見<sup>32)</sup>も見られ、昭和30年代の旅行者とは正反対の見方を示す。こうした森林像を伝えたのは京都の媒体であった。林業不振が深刻化する平成10年以降、磨丸太を生産する森林の減少が進む中で、再び山腹に整然と並んだ幹の北山杉に注目が集まる。これは住民が「取り戻そう」<sup>33)</sup>と願う北山杉と一致する森林像である。

今後の景観保全に向けて、住民が時代により変化する森林像をどのように評価するかを議論した上で、森林の形態や施業方法が検討されることが望ましいといえる。近年住民によって景観保全としての新たな森林像が生まれているが、それを再現するために山腹の丸太一斉林全てに手を加えることは、需要が激減した現在では非常に難しい。しかしながら、かつて品質基準の転換に応じた生産方式の転換を繰り返してきたように、集約型の磨丸太生産と粗放型の用材生産の間に磨丸太の生産方式の転換を図り、粗放的な用材生産方式の援用や、幹が林立した昭和40年代に行われた択伐などを導入することで、磨丸太生産を継続しながら、その森林像に近づけていくことは可能だと考えられる。

本研究では新聞および雑誌に掲載された森林の静止画像に限定した。今後は、媒体を映画やテレビ番組など映像に広げ、森林を含む地域像を把握することが課題だと考えられる。分析についても統計解析による手法を活用し、研究結果の信頼性をさらに高めていくことが必要である。

### 引用文献

- 1) ジョン・バージャー著、伊藤俊治訳(1986): イメージ・Ways of Seeing, 12, パルコ出版
- 2) 黒田乃生(2003): 観光地の成立過程における記号化に関する研究—岐阜県大野郡白川村を事例に—: 都市計画論文集 38(3), 679-684
- 3) 小野良平(2005): 明治以降の山林の変容と「ふるさと」風景観の成立: ランドスケープ研究 68(5), 411-416
- 4) 読売新聞 (1976年10月3日付朝刊26頁)
- 5) 京都新聞 (2011年5月20日付朝刊24頁)
- 6) 文化庁・財団法人京都市文化観光資源保護振興(2006): 文化的景観(北山杉の林業景観)保存・活用報告書, 29
- 7) 日下部(大)家文書(1871): 中川村立木取調帳
- 8) 京都府編(1881): 京都府地誌
- 9) 京都府山林会(1909): 京都府山林誌, 309-310
- 10) 京都大学農学部磨丸太生産グループ(1977): 京都府を中心とした磨丸太林業の研究, 90
- 11) 岩井吉彌(2000): 北山林業とその育林技術の歴史的变化、個性ある施業技術は今Ⅲ: 林業技術 628, 19-20
- 12) 岩井吉彌(1986): 京都北山の磨丸太林業, 54, 都市文化社
- 13) 前掲6), 38
- 14) 前掲10), 28
- 15) 全国森林組合連合会・林業金融調査会(1955): 林業金融基礎調査報告(VI) 京都府上京区北山中川町, 19
- 16) 前掲12), 36
- 17) 前掲10), 93
- 18) 前掲10), 90
- 19) 岩井吉彌(1992): 「磨丸太産地」北山林業の特徴: 農林統計調査 42(1), 13
- 20) 前掲10), 94
- 21) 前掲12), 56
- 22) 前掲10), 93
- 23) 住宅金融公庫(1996): 住宅・建築主要データ調査報告 戸建住宅編
- 24) 財団法人日本木材総合情報センター(1996): 木材需要動向分析調査
- 25) 岩井吉彌(2000): 20世紀における北山林業の変貌と現代的課題: 林業技術 699, 22-23
- 26) 前掲6), 44
- 27) 京都新聞 (1966年9月17日付朝刊3頁)
- 28) 京都新聞 (1967年6月20日付朝刊13頁)
- 29) 京都新聞 (1970年11月2日付朝刊12頁)
- 30) 白川書院編(1985): ちよびり硬派なハイキング 京都学習ハイク 人の手があまり入っていない京都の北山を歩く: 京都 408, 17
- 31) 澤野久雄(1960): 洛北で杉の香をかぐ: 旅 34(3)
- 32) 京都新聞 (1991年3月6日付朝刊27頁)
- 33) 京都新聞 (2010年12月4日付夕刊8頁)